季刊 トライホークス

TRI HAWKS Quarterly Issue vol.59 / 2020

59

はじめに

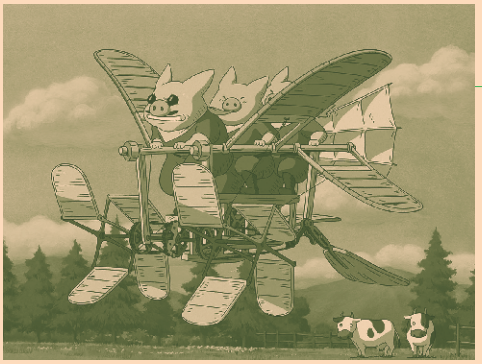
ジブリ美術館の企画展示室は、展示ごとに部屋を作りこみます。例えば「3びきのくま」展では、くまの家が再現されました。緑の表紙でおなじみの絵本『3びきのくま』（福音間書店）。うす暗い部屋にはテーブルとイス、木の器とスプーンが3つずつ。くまサイズなので、かなり大きな作りです。「小さなルーヴル美術館」展では、赤い絨毯を敷き、ルーヴル美術館所蔵の名画を壁一面に飾り、ひと部屋にぎゅっと〝ルーヴル美術館〟を入れました。（もちろん、本物ではなく縮小された複製画ではありますが。）

作り込まれた展示室も、会期が終了すれば10日間で模様替え。展示の最終日、営業を終えるとその夜から撤収作業が始まります。展示室の壁や腰板はしつらえているものの、壁ごと展示を作っているのであまり使われることはありません。壁が取り払われ、新しい壁が設置され、室内ががらっと変わります。11月から始まった「手描き、ひらめき、おもいつき」展もたくさんの資料をわかりやすく伝えるために作られた空間です。企画展示ごとに物と空間、その両方を楽しんでいただけたらと思います。

季刊トライホークス　2020年 | 59号
発行日……2020年2月19日 | 発行人……中島清文
発行所……徳間記念アニメーション文化財団
東京都三鷹市下連雀1-1-83　三鷹の森ジブリ美術館
編　集……石光紀子　机ちひろ | デザイン……川島弘世
印　刷……図書印刷株式会社 | 非売品

企画展示「手描き、ひらめき、おもいつき」展より

空想の空とぶ機械達



©2002 Studio Ghibli

原作・脚本・監督…宮崎駿
上映時間…5分59秒
2021年5月まで上映予定

物大模型のはばたき機など、宮崎駿監督の好きなものが展示物として登場しました。この展示のために作られた短編映画「空想の空とぶ機械達」は、現在開催中の「手描き、ひらめき、おもいつき」展にあわせて地下1階の映像展示室にて上映しています。

2002年の企画展示「天空の城ラピュタと空想科学の機械達展」は、映画「天空の城ラピュタ」（1986）の企画のもととなった19世紀のSF小説の機械達を取り上げ、タイガーモス号や火山島の秘密基地を解説するパネル、実

短編では、映画「ラピュタ」と19世紀に空想された〝大空を飛びまわる飛行機械〟を紹介しています。蒸気機関の実用化で科学技術が発達した当時、人々が夢見た乗り物は、空中から電気をとって飛ぶ機械や、自由に行き交う空中タクシーなどなど、発想もデザインも奇抜なものばかりでした。どの乗り物も魅力的なのは、未来が明るく輝いて見えていたからではないでしょうか。多くはセルに絵画的に着色する〝ハーモニー〟という技法で描かれ、陰影のある独特の質感に懐かしさを覚えます。ナレーションは宮崎監督が自ら務め、弾んだ声で〝空飛ぶ機械達〟を紹介し、飛行技術が発達して空の旅が身近となった現代でも、人類の「大空へのあこがれはいつまでもきえないでしょう」と結びます。

04年に展示が終了した後は、この楽しい短編もなかなか上映の機会がありませんでした。この機にぜひご覧ください。

◎価格は全て本体価格（税抜き）です

本棚より

世の中にはいろいろな本があります。
古今東西、恋物語もあれば、冒険物語もあり、
たくさんある本の中から、トライホークスに置かれているおすすめの本とおすすめのお話を紹介していきます。
トライホークスの本棚の中の一冊から、みなさんの本棚の一冊にしていただけたら嬉しいです。

ジェイミーが消えた庭

ジェイミーが消えた庭
著者…キース・グレイ
訳者…野沢佳織
徳間書店　1,400円

この本が日本で出版されたのは2002年1月です。直後にこの本を手に取った宮崎駿監督が「最近いちばん好きになった作品」として図書室でも置くことになり、今もおすすめの本として本棚の一角にて紹介しています。

主人公は勉強はまあまあだけど、運動はそこそこ、周りからはパッとしないヤツと思われている14歳の「ぼく」。そんな「ぼく」と相棒のジェイミーは、夜になると何軒も連なっている家の裏庭を駆け抜けます。それは少年たちが夢中になっているゲーム「クリーピング」です。「ダッシュ」で駆け抜け、「カゲ」に隠れ、「イッキとび」で塀をこえる。家主に見つかり「御用」になったら最後です。最難関は町で一番長い「ダーウェント・ドライブ」。クリアしたら2人は最高の「クリーパー」になるはずだったけれど、「ぼく」のヘマでジェイミーが捕まってしまって……。

1人で挑戦してはいけない、家や庭のものを壊さない……、少年たちはいくつものルールを守り、家主のこと、どこで身を隠すことができるか、犬を攻略する方法など情報を集め、作戦を練ってクリーピングに挑みます。「勉強はもっと年を取ってからがんばればいいさ。でも、クリーピングは今しかできない。」とジェイミーが話すように、大人から見たらくだらないかもしれないけれど、彼らにとっては冒険とスリルを備えたゲームであり、意地とプライドと名誉をかけた真剣勝負なのです。

作者はどきどきする冒険の話と友情を書きたかったそうです。魔法の国に行かなくても、今自分が生きている世界にも冒険はあるということ。そしてこの物語の中の「ぼく」とジェイミーの友情。タイトルでも想像が着くと思いますが、ジェイミーの身に変事が起こります。自分がしてしまったことへの後悔、ジェイミーとの関係を修復したくて努力する「ぼく」。2人がやろうとしたことは、次へ進むために必要なことでもありました。

14歳の少年たちが抱えた苦悩や葛藤を、「クリーピング」というゲームを通してスピード感あふれる描写で描かれた物語です。

愛蔵版おはなしのろうそく10
まめたろう
編…東京子ども図書館
東京子ども図書館　1,600円
◇「おはなしのろうそく」には、いろいろな国の昔話や創作のお話が収録されています。

アイヌの昔話より

クナウとひばり

むかしむかし、アイヌの国の上に〝なかぞらの国〟がありました。なかぞらの国の上には、もっと広くて、ずっと青い、〝おおぞらの国〟がありました。おおぞらの国の神さまは、なかぞらの国の美しい女神クナウをお嫁さんに迎えることにしました。クナウはにれの木の糸で嫁入りの晴れ着を織るために、たびたびアイヌの国におりていきました。そしてアイヌの国の美しい森や野原が大好きになり、とうとう帰ってこなかったのです。

おおぞらの国の神さまは、ひばりにクナウを探すよう言いつけましたが、ひばりは戻ってきません。次に獣のテンがクナウを探しに出かけました。テンがクナウを見つけ、太いしっぽでたたくと、クナウはぽってりと黄金色をした花に変わりました。クナウは神にそむいたその罰で、アイヌの国の草になったのです。一方神さまの言いつけを忘れ歌い暮らしていたひばりは、おおぞらの国に帰ることを許されませんでした。

黄金色の花は福寿草。雪の中から顔出し花を咲かせる福寿草は、早くアイヌの国を見たいと願うクナウなのです。大地と空を舞台に、北の国の美しさが伝わってくるお話です。

［連載……第4回］ロアルド・ダールとその作品

『単独飛行』

自由と飛翔から始まる青年ダールの冒険物語

『単独飛行』は、連載1回目でも紹介した自伝的小説『少年』の続編だ。ダールの父親の話から始まる『少年』は、たしかにどこまでが誇張でどこまでが事実なのか不明だが、読み物としては文句なく面白い。『少年』に書かれているのは、腕白ないたずらっ子ダールの幼少期からパブリックスクール卒業時までだが、『単独飛行』は社会に出た青年ダールの物語。シェル石油会社入社後、ダールは本人の希望どおりアフリカへ赴任する。本書の「あとがき」で宮崎駿も指摘しているように、自由に生きたダールの「すごいところは、全部自分で選んでそこに行っているということ」だろう。『単独飛行』はイギリスからアフリカへの船旅から始まる。冒頭に「できるだけ篩(ふるい)にかけて精選し、自分にとって忘れがたいと思われる体験だけを書くことにした」とあるように、本書も『少年』に負けず劣らず奇想天外なエピソードから始まる。

赴任地ダルエスサラームで、ダールは猛毒をもつ大ヘビ「マンバ」やライオンに遭遇するが、いずれも仰天させられるエピソードの連続だ。特に「スネークマン」とグリーンマンバの攻防は、その場にいたダール達と同じく息を潜めながら凝視してしまう。本書からは、ダールの文章が初めて活字になったのは、ナイロビの新聞に掲載されたライオンに関する目撃談だったことが分かる。短編集『奇才ヘンリー・シュガーの物語』所収の「思いがけない幸運 いかにして作家となったか 」によると、学校時代のダールは「考えを記述する能力皆無(かいむ)」とみなされていたが、短編小説家としてのデビューよりもずっと前に書くことで報酬を得たことがあったのだ。また、この地で出遭うムワヌムウェジ族の少年ムディショとの友情は、後年児童書内の人種差別主義的な描写で（本人が意識していなかったとはいえ）糾弾され修正を余儀なくされる作家とは思えないような、異文化理解の姿勢を感じさせる。

第二次世界大戦が始まると、ダールはRAF（英国空軍）のパイロットに志願する。じつは、本書の約3分の2を占めるのは、イギリスから遠く離れた未知の土地でくり広げられる、若き戦闘機パイロットの冒険である。初めて出版されたダールの短編は、短編集『飛行士たちの話』所収の「ちょろい任務」だが、あたかも実話のように語られる墜落の話が、実際にはどうだったのかということも詳述されている。戦争中ダールは文字通り死と隣り合わせの日々を送ることになるが、本書にも「長距離のやや危険な旅をたった一人でするときは、喜びや恐怖といった感覚のひとつひとつが極端に増幅される」とあるように、ハラハラする場面が続く中、「喜び」を伴う「驚き」の場面は輝いて見える。特に2つの場面ではダールの幸福感を共有せずにはいられない。1つは、飛行訓練を受けるために、ダルエスサラームからナイロビへ移動する途中でキリンやゾウの群れに出遭う場面。もう1つは、初めての「単独飛行」（1939年12月13日）の直後、許可を得て長時間自由に大空を飛びまわる場面。ダールにとって飛翔は、学校から解き放たれた後に体験した自由の象徴だったのだろう。遺作となった絵本『ふしぎの森のミンピン』のリトル・ビリーは、ミンピン族を救うため、白鳥の背に乗って怪物を退治する。前掲書『ヘンリー・シュガー』所収の「白鳥」の主人公ピーターは危機から逃れるために飛行力を手に入れ、無事に母親が待つ自宅へ帰り着くが、危機一髪のところで生還した若き日のダールが、やはり無事だった母親の元にたどり着いたところで、本書は幕を閉じる。

『単独飛行』（原書タイトル Going Solo の solo は「単独飛行」の意）と『少年』は、両方とも永井淳が翻訳を手がけている。『少年』では寄宿学校を、『単独飛行』では戦争を生き延びたダール。2冊続けて読むと、ユニークかつ豪胆な作家の幼少期から青年期を、優れたストーリーテリングで堪能できること請け合いだ。

（清泉女子大学文学部教授
笹田裕子）

単独飛行
訳者…永井淳
ハヤカワ文庫　800円

いわさゆうこ

Yuko Iwasa

子育て時代が絵本の世界へと導いた

ジブリ美術館は、周囲の自然を生かすようなかたちで建物が設計されました。花の咲く植物もたくさんありますが、クヌギやコナラなど〝どんぐり〟のなる樹木も生えています。そんなこともあり、絵本『どんぐりノート』は来場者によく手に取られる絵本ですが、スタッフがどんぐりについて調べるときにお世話になる本でもあります。今号は作者のいわさゆうこさんに〝夢中になって読んだ本〟について書いていただきました。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

児童書という世界に関わらせてもらっている私ですが、絵本作家になりたいと強く願っていたわけではなく、この分野にたどり着いたことは、気がつくとそうなっていたというしかありません。年齢的にも遅い出発でした。

そもそも絵本との出会いは、長男が生まれたことに始まります。家庭でも保育園でも絵本に触れない日はない暮らしのなか、子どもと一緒に私も絵本の世界に足を踏み入れたのです。

私自身の絵本体験といえば、太平洋戦争後の田舎暮らしのなか、兄姉のお下がりといっていい講談社の『曾我兄弟』や、『岩見重太郎』『牛若丸』など。特に記憶に残っているのは『童謡画集』。母と一緒に歌った画面は今でも鮮明に覚えています。しかし当時の私は、家の周りに広がる草木や生きものたちに目を奪われていた子どもでした。

話をもどすと、若いときは芝居関係の裏方仕事やイラストなどの仕事をしつつも、なかなか自分らしい表現の方向を見つけられないまま、出産、子育てへと突入した私にとって、絵本は私の中に沈殿していた表現欲を刺激したことは確かでした。

この本の作者は絵はうまいのに気持ちが見えないですナァ、とか、この展開には無理がありますナァ、とか、腹の底では毒も吐く私でしたが、目を見張るようなたくさんの作品にも出会ったのです。ことばと絵、決められた枚数というしばりの中で展開する物語手法。子どもの受けも予想外だったりするおもしろさ。絵本という表現媒体の魅力にはまっていったのです。

長男の保育園卒園まであと1年というころ、先生方や仲間たちに何か記念になることが私にできないか、と考えました。そしてそれは絵本作りでした。テーマは決まっていました。年中さんから長いスパーンで遊んでいた〝くまの居たとこさがし〟、先生たちの指導のもとみんなで夢中になったごっこ遊びでした。

無謀にも絵本作りに取り組むことにした私ですが、そう決めてから好きな絵本は私の師匠たちとなったのです（モノクロの絵本は、手作り本として無事子どもたちに渡すことができました。その上『ついてきた くま』（文化出版局）のタイトルで出版され、私のデビュー作となったのでした）。

さて、私に勝手に師匠扱いされた作家たちを紹介しましょう。その作家たちとは、おもに1930年代からアメリカ合衆国を舞台に活躍した方たちです。マリー・ホール・エッツ、バージニア・リー・バートン、イングリとエドガー夫婦（ドーレ

ア夫妻)、ロバート・マックロスキー、エズラ・ジャック・キーツなど、現代絵本の礎となった巨星たちです。

その中で好きな本は？と問われれば、バートンの『せいめいのれきし』を挙げざるを得ません。バートンのどの本をとっても、語りたいストーリーとビジュアルの演出は見事で、ページをめくるたびにソウキタカと思わせる運び。『せいめいのれきし』は、好きはもちろん敬服した本というのがアタリで、80ページ近い長丁場、作り手の意思とアイデアが満載の本作りが成されています。銀河系、太陽、地球に始まり私たち人類に至るまで、長いながーい命の流れをかんで含めるように語っていきます。準備から作業にかけた時間とエネルギーを想像しつつ、本の隅々まで気持ちを込めて描き切った持久力に圧倒されます。バートンはこの本の出版から6年後に亡くなります。

日本が誇るかこさとし先生は、一昨年亡くなってしまわれましたが、最後に作りたかったと思われる下描きのようなものをテレビ番組で見ました。ビッグバンから始まり、すごい勢いで膨張する宇宙空間、そして地球で起きた命たちの物語を描こうとなさっていたようでした。こちらも見たかったなあと溜息をつくしかありません。

再びバートンの『せいめいのれきし』ですが、芝居仕立ての構成でわかりずらさを片ページ2色プリントで絵解きし、膨大な過去の夢舞台から現実の自分たちの暮らしへと着地させます。ここにあることの奇跡に想いをはせ、愛しんで生きてねと語りかける直球の絵本なのです。

私がつくる絵本たちは科学絵本という性格を持つようですが、この地球上に生まれ、たぐいまれな綱渡りの先に存在する生命の歌の断片だけでも紡ぎたいと思いながら作業しています。少しでも子どもたちに届くようにと。

いわさゆうこ

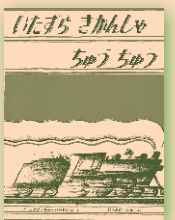
1946年宮城県生まれ。武蔵野美術大学卒業。子育て中に子どもたちに配っていた冊子が『どんぐりノート』(文化出版局／大滝玲子共著）として出版。それ以来どんぐりがライフワークになる。どんぐり関係本に『コロコロどんぐりみゅーじあむ』(アリス館)、『どんぐり見聞録』(山と渓谷社)、『どんぐりハンドブック』(文一総合出版)。最新作に『ぽっとんころころどんぐり』(童心社）など。その他に『うみにあいに』(アリス館)、『まつぼっくりノート』『野の草ノート』『やさいノート』(以上、文化出版局)、『きゃっきゃ キャベツ』『つやっつや なす』『まっかっか トマト』(以上、童心社）など。東京都武蔵野市吉祥寺在住。

トライホークスの本

どんぐりノート
作…いわさゆうこ 大滝玲子
文化出版局　1,300円

[夢中になって読んだ本]

❶



❷

❸

❹

❺

❻

❶**せいめいのれきし 改訂版**＊　文･絵…バージニア･リー･バートン　訳…いしいももこ　監修…まなべまこと　岩波書店　1,700円
❷**いたずらきかんしゃちゅうちゅう**　文･絵…バージニア･リー･バートン　訳…村岡花子　福音館書店　1,200円
❸**ひよこのかずはかぞえるな**　作…イングリ･パーリン･ドーレア／エドガー･パーリン･ドーレア　訳…瀬田貞二　福音館書店　1,300円
❹**ピーターのいす**　作･絵…エズラ･ジャック･キーツ　訳…木島 始　偕成社　1,200円
❺**わたしとあそんで**　文･絵…マリー･ホール･エッツ　訳…与田準一　福音館書店　1,100円
❻**かもさんおとおり**　文･絵…ロバート･マックロスキー　訳…渡辺茂男　福音館書店　1,300円

＊印の本は、いわささんが選んだ本のタイトルをもとに、現在出版されている同作改訂版を挙げました

SINCE 2001

山猫だより

アリソン・ジェイさんのこと

毎年年末になると、宮崎駿監督やジブリ美術館のスタッフ宛に、イギリス在住のイラストレーターのアリソン・ジェイさんから、グリーティングカードが届きます。アリソンさんの絵は、明るい色で塗られたイラストにワニスをぬってヒビをいれ、古い絵のように仕上げるという特徴があります。カードには彼女のイラストが印刷されているので、ご本人からいただくと特別な気分になります。そして、丸文字で書かれた文章はアリソンさんの人柄を思い起こさせ、読んでいるとあたたかい気持ちになります。

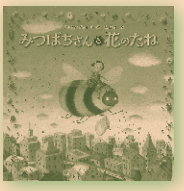
アリソンさんと初めてお会いしたのは、2014年5月、企画展示「クルミわり人形とネズミの王さま展」の内覧会開催のときでした。美術館は、アリソンさんを内覧会のトークショーに、〝登壇者〟としてお招きしました。「クルミわり展」は、宮崎監督がアリソンさんの絵本『くるみわりにんぎょう』(徳間書店)と出会ったことをきっかけに、原作であるE.T.A.ホフマンの『クルミわりとネズミの王さま』(岩波書店)を読み解き、その魅力に迫る展示でした。宮崎監督は「とてもしあわせな絵本。おすすめします」とアリソンさんの絵本にコメントを寄せています。そして、絵本とクルミ割り人形を小さな女の子の友だちにプレゼントしたとき、とても喜んでもらえたことも嬉しかったそうです。

来日したアリソンさんは、相手の話をじっくりと聞き、はにかみながら話す少女の雰囲気を持つ大人の女性でした。トークショーでは、絵本に登場するおいしそうなお菓子に関して「お菓子が大好きなのでたくさん描いたんですよ」と答え、会場を盛り上げてくれました。かわいらしい絵を裏切らない人柄に、美術館スタッフもファンになり、一緒に仕事ができたことを嬉しく思いました。以来ときどき連絡をとりあい、現在も交流は続いています。

そんなアリソンさんの絵本をご紹介したいと思います。1冊目は『みつばちさんと花のたね』。雨の日にあらわれたみつばちさんを助けて、仲良くなったデイジー。大きくなったみつばちさんの背中に乗って、野原へと飛び立つと……。みつばちさんもデイジーも花々も、ページに描かれているものすべてが愛らしい絵本です。この本は2016年にイギリスで出版されましたが、アリソンさんが映画「となりのトトロ」(1988)や美術館オリジナル短編アニメーション「パン種とタマゴ姫」の設定に影響を受けたと話していました。図書室のウィンドウでは、アリソンさんの家族が作ったみつばちさんの人形をお借りして、展示したこともありました。

2冊目は『きのうをみつけたい!』。人生の中で昨日が一番楽しい日だったと残念に思う少年が、どうしたら昨日にもどれるのか、おじいちゃんに聞くと……というお話です。おじいちゃんが、内気そうな孫に寄り添い明日へとでかける姿に、人と人の間に存在する信頼や愛情が感じられます。宮崎監督は「とてもイイ、ぼくは大スキです。古いオートバイにマゴをのせて走る!これはジジイの夢です。」とおすすめしています。

他に、動物たちの絵を見ているだけでも楽しい『ちょっぴりおかしなどうぶつえん』(徳間書店)なども、あわせて手に取ってみてください。



みつばちさんと花のたね
作・絵…アリソン・ジェイ
文…蜂飼耳
徳間書店　1,700円

きのうをみつけたい!
作・絵…アリソン・ジェイ
訳…蜂飼耳
徳間書店　1,800円

おわりに

アルド・ダールを特集した連載が今号で終了しました。自伝的な小説『少年』で印象的なのは、ダールが子ども時代に出会ったという強烈な先生や上級生の存在です。ダールの作品に登場する〝理不尽な大人〟のモデルなのではと、想像がふくらみました。少年時代のいくつかのエピソードは、『チョコレート工場の秘密』をはじめとするダールの児童書にもつながるので、どこまで創作なのかは謎ですが、彼の作品を子どもたちが好きな理由がわかる気がしました。